説　　教　　イザヤ書 41 章 8～10 節　　ガラテヤ書 1 章 1～2 節

「ガラテヤ教会への挨拶」　ガラテヤ書講解（1）
２０１２・１１・１８（説教１２４７１４５７）

本日からご一緒に、ガラテヤ人への手紙を通して福音の御言葉を聴いて参ります。全部で約 50 回の連続講解説教になる予定です。さて、この「ガラテヤ人への手紙」は使徒パウロの書いた手紙の中では比較的早く、テサロニケ人への第一、第二の手紙に続いて、西暦 57 年頃に書かれたものです。パウロの伝道活動のごく初期に書かれた手紙のひとつです。しかしすでにこのガラテヤ書の中には、それ以降のパウロの手紙、あるいはパウロの伝道者としての生きかたを貫く、変わることのないひとすじの流れを見ることができるのです。既にそれは今朝ご一緒にお読みしたこの手紙の冒頭 1 章 1 節 2 節に遺憾なく現われています。

それは何かと申しますと、主イエスは弟子たちを伝道旅行へと遣わされるにあたり「道で誰にも挨拶をするな」とお教えになりました。今朝の説教の題が「ガラテヤ教会への挨拶」ですから、この主イエスの御言葉を引用すると、みなさんは不思議に想われるかもしれません。しかし主イエスが弟子たちに「道で誰にも挨拶をするな」と言われた意味は「本当の挨拶（神の祝福）のみを語る者となりなさい」という意味です。人の顔色を伺い、人に媚びへつらって、見かけだけの挨拶をする教会（キリスト者）になるなということです。誰に対しても真に語るべき祝福の言葉をこそ、あなたは持っているではないか。ただそれだけを「本当の挨拶」（祝福）として語る者になりなさいと、主はお命じになったのです。

言い換えるなら、それは来るべき「主の日」に備えつつ、主の御前に、主と共に歩む者になる喜びと幸いです。いつどのような時にも、神の前に神の僕として神と共に歩む、そういうあなたであり続けなさいということです。そのような恵みを、私たちはいま豊かに戴いているではないか。その幸いにいつも歩む者とされているではないか。だから私たちは、人に向かって社交辞令の挨拶に生きる群れではない。どのような相手に対しても、語るべき「本当の挨拶」（祝福）を携えゆく群れなのです。そのように主イエスは弟子たちに、否、私たちにお教えになったのです。

そこで、使徒パウロはこの手紙をガラテヤ教会に書き送るにあたり、まずこのように挨拶をするのです。「人々からでもなく、人によってでもなく、イエス・キリストと彼を死人の中からよみがえらせた父なる神とによって立てられた使徒パウロ…」。これはパウロの自己紹介です。この「使徒」という字は「神によって遣わされた者」という意味です。遣わされたというからには、そこには神から授かった「使命」があります。それは、十字架の主イエス・キリストの福音のみを全ての人（全世界）に遍く宣べ伝えることです。その使命のためにこそパウロは「使徒」として立てられたのです。だから、その使徒たる権威（使命を担う務め）は「人々からでも、人によってでも」

ありません。それはただ「イエス・キリストと彼を死人の中からよみがえらせた父なる神」から与えられた使命なのです。そのことを私たちは、また私たちの教会は、いつも正しく自覚しておらねばなりません。それこそ「道で虚しい挨拶をする」群れであってはならない。どのような人々にも、あらゆる時代に、いかなる状況の中でも、私たちは十字架の主イエス・キリストの福音のみを、語るべき「本当の挨拶」として語り続けるのです。ただそこにのみ、全ての人間の真の唯一の救いがあるからです。

もうすぐ待降節（アドヴェント）に入ります。キリストの御降誕（クリスマス）のおとずれは、教会によってキリストの御身体に連なる全ての人々の罪と死からの贖いと解放の音信です。それならパウロがここ１章１節で「人々からでもなく、人によってでもなく、イエス・キリストと彼を死人の中からよみがえらせた父なる神とによって立てられた使徒パウロ」と語るとき、パウロは何よりも自分自身を、キリストの御降誕の恵みにあずかり、死者の中から（罪の支配から）甦らせて戴いた者として紹介しているのです。まぎれもないこの私が、復活の主によって救われた者なのだと語っているのです。

私たちは、自分が信ずる福音の喜びを何とかして他の人たちにも宣べ伝えたいと願います。一人でも多くの人が教会に来て欲しいと願います。しかしそのとき、私たちは意図せずしてこういうことをしていないか。あるいはこういうことを語っていないでしょうか。「私は駄目なキリスト者だから、私のことは見ないで、ただキリストだけを見て、キリストだけを信じる人になって下さい」。ある意味でこれは正しいでしょう。私たちが語るのはキリストの福音のみであって自分自身ではないからです。しかしよく考えてみるなら、そのような時の私たちは実はキリストをではなく、むしろ自分の弱さを中心に据えているのです。つまりそのとき、私たちはやはり「道で挨拶をしている」のです。人の顔色のみを伺い、福音の喜びに生きていないのです。あるいはそういう後ろめたさから、私たちは他の「信仰の偉人」と呼ばれる人々を代理に立てることをします。たとえばひと昔前なら、アルベルト・シュヴァイツアーやマザーテレサの働きがよく引用されたものです。

しかし、パウロはここでどのように語っているでしょうか。パウロは「イエス・キリストと彼を死人の中からよみがえらせた父なる神とによって立てられた使徒パウロ」と、はっきりと自分を通して「救い」を語っているのです。パウロも自分の弱さを知る人でした。おそらく私たちの誰よりも強くパウロは自分の弱さを知っていたでしょう。何よりもパウロは、かつてパリサイ人として教会を迫害した人間でした。だからパウロは自分のことを「使徒と呼ばれる値うちのない者」と申しています。しかしそのような者を主なる神は「ただ恵みによって選び、使徒として立てて下さった」と語るのです。ガラテヤ書でもその姿勢は些かも変わりません。自分という人間は測り知れぬ弱さと破れを持つ罪人のかしらに過ぎない。しかしまさにその私が十字架と復活の主イエス・キリストによって限りない「救い」にあずからせて戴いたのだ。だから私が「使徒」として「立てられた」のは「人々からでもなく、人によって」でも

ない。それはただ「イエス・キリストと彼を死人の中からよみがえらせた父なる神」によるのである。そのように、みずからに与えられた恵みの証しをなしつつ、パウロは「罪人のかしら」なる自分に与えられた測り知れぬキリストの救いの出来事を全ての人々への自己紹介とするのです。「この私を見なさい。そして、この私に与えられた限りない救いに、あなたも、あなたも、あずかる人になって下さい」と語るのです。そう語らざるをえない者こそが「使徒」なのです。

それこそ第一コリント書 4 章 16 節にパウロが「わたしにならう者となりなさい」と語っている理由です。自分が立派で清い者だからではありません。そうではなく、自分に与えられたキリストの救いが素晴らしく、完全なものだからです。幼い子供が素晴らしいものを手に入れて、それを誰彼となく見せびらかすように、いまや使徒パウロは、自分に与えられた大いなるキリストの救いを全ての人に証しせずには止まなかったのです。「わたしにならう者となりなさい」とまで断言しているのです。これをこそガラテヤ諸教会の人々に対する心からの「挨拶」（祝福）として語らざるをえなかったのです。

パウロは、こうした恵みの「挨拶」を共有する喜びと感謝の内に、信仰の仲間たちをもここに紹介しています。すなわち 2 節にあるように「ならびにわたしと共にいる兄弟たち一同から、ガラテヤの諸教会へ」とあることです。この「わたしと共にいる兄弟たち」とは、パウロと共に伝道旅行の苦労を共にした同労者たち、あるいはパウロの働きを、祈りと献金と奉仕者を送ることによって支え続けたアンテオケの教会のことを指しているのでしょう。いずれにせよその人々、または教会もまた「人々からでもなく、人によってでもなく、イエス・キリストと彼を死人の中からよみがえらせた父なる神とによって立てられた」ものだとパウロは語っているのです。そして同時にこの手紙を読む全ての人々に、あなたもまた同じ神の恵みの内に生かしめられているのだと明らかにしているのです。あなたもまた同じ救いにあずかる者とされているのだと宣言しているのです。

最後に「ガラテヤの諸教会」とありますが、この「諸教会」というのがガラテヤ書の具体的な宛先ですが、この「諸教会」とはかなり大きな範囲に分散していたガラテヤ地方の小さな教会（家の教会）の集まりをさしています。ガラテヤというのはコリントやローマのような街の名前ではなく、神奈川県の湘南地方というような、かなり広い範囲の地域全体の名称なのです。その広い地域の至るところに小さな「家の教会」が次々に生まれつつあった。その全ての諸教会を指してパウロは「ガラテヤの諸教会」と呼んでいるわけです。ここにこのガラテヤ書の大きな特色があります。パウロの他の手紙のように、あるひとつの街の教会、あるいは個人に宛てられた手紙というよりは、今日の私たちの東海連合長老会のような、相当に広い地域の諸教会に宛てて書かれた手紙なのです。

その意味で、このガラテヤ書を私たちが学ぶことは、プレスビテリー（中会）の形

成という大切な務めにも豊かな導きを受けることです。それは政治的な地域の連合体、まして行政区画のような教会群などではなく、何よりも同質の信仰告白によって結ばれ、復活の主によって立てられた、かけがえのない「諸教会」であるということを私たちは教えられているのです。そして新約聖書のもとの言葉では、この「諸教会」も同じ「教会」を意味する“エクレシア”という言葉です。その意味は「神によって選ばれ、招かれ、立てられた群れ」です。つまり今朝の御言葉で使徒パウロが、限りない喜びをもって全ての人々に宣べ伝えている福音の確かさは、キリストによって贖われ立てられた教会の確かさ、その主の御身体である教会と中会に連なる私たちの「救いの確かさ」でもあるのです。

ここに私たちは、使徒パウロ、また世々の聖徒らと共に「人々からでもなく、人によってでもなく、イエス・キリストと彼を死人の中からよみがえらせた父なる神」による救いの確かさと信仰告白の豊かさを、みずからに与えられた永遠の喜びとなし、その確かな救いの恵みを自分を通して証ししてゆく者とされていることを覚えたいと思います。